字に書き改め、かつその他に句讀點を加へたりした。これは、もつぱら讀む時にあたつての便を思つたもので、特に斷つておきたい。次に解題は紙幅の許すかぎり詳細に述べてはおいたが、素材の上から十篇を、(一)、仙鄕物(「浦島太郎」と「鶴の草紙」)(二)、重考物(「御曹子島わたり」と「あきみち」)(三)、申し子物(「一寸法師」と「瓜姫物語」)(四)、畸人物(「物ぐさ太郎」と「福富草子」)(五)、往生物(「小敦盛」と「紫式部のまき」)の五種に分類したがために、その順に從つて提出することにした。從來、お伽草子の注譯書はほとんど無いといつてもよい。本書の注は、もとより不滿足のものではあるけれど、初めてこの種の草子を讀む人々のことを想ひ、些かながら新見を加へておいたところもある。以上記して、本書のはしがきとする。

昭和二十八年春

編者しるす

註要　お伽草子名作選

はしがき……一
一　浦島太郎……一
一　御曹子島わたり……九
一　一寸法師……三
一　物ぐさ太郎……三七
一　福富草子……五三
一　鶴の草紙……六三
一　瓜姫物語……七一
一　小敦盛……七九
一　紫式部のまき……九一
一　あきみち……一〇一
お伽草子解題……一二五

福富草子

人は身に應ぜぬ果報をうらやむまじきことになん侍る。

むかし「福富の織部」とて長者一人侍りけり。いかなる過去の宿緣にや、身に生れつきたる藝ひとつ候ひけるが、習はざるに奇特をあらはし、計らざるに名を發して、世の人、神の如くにぞ思ひける。(一)其藝あさましくいぶせければ、上中下の人までも、よく聞き知りて、笑を催すことなりければ、おのづから公け方にもきこしめし、もて興じおはしましける。

こと斜めならず。されば富めるが上に富み、樂しきが上に樂しみて、棟に棟を爭ひ、藏に藏をたてて、(二)五の種つもの耕さずして庭にみちみちたり。それが隣に「木樵の藤太」とて、いと貧しきもの侍り。こは織部にひきかへて、朝夕の烟も竈に絶え、(三)とつの路草しげりつゝ、(四)築地にあらぬ柴垣や、幔幕ならぬ薦垂れに、夜寒の床を明かしかねつゝ、軒も垣をも

(一) 放屁の藝のことであるから、ひどくいやらしい。

(二) 外面。

(三) 柴が塀の代りとなり、蔦が幕の代りをなしてゐるとのこと。

○五穀

このためにこぼちとりて、(一)餘り寒さの風を入れける。夏はあさましき麻の衣古びて、破れ團扇にて蚊を拂ひ、軒の夕顏の華やかなるを慰めにて明かしくらすめる。(二)

幼かりしより契りし人あり。藤太には十あまり姉にや侍りつらんかし。丈立すくよかに、顏つき荒じく、口廣ければ、人、鬼姥とぞ申しける。鬼姥或日夫の木樵に向ひて申しけるは「士農工商の遊民は一つ故つける藝の侍りてこそ、名を四方に輝かし世渡るものにて候へ。あなあさまし、そこは如何なる昔の成行の拙さ。高身になす能のおはせぬことよ。いと口惜しとも口惜しや。打ち讀み、走り書き、(四)吹きはやし給ふことこそならずとも、あの隣の福富が一藝ばかりの事は、習はゞ何とか習はざらん。さらばかしこに行きて、いかにも(五)打歎きて、心を盡し師匠とあふぎ、弟子ともなり給ひて習へよ。(六)神變ある世ならば、あれ程にこそおはせずとも、(七)世渡るばかりのたづき、などか成らざるべき。すぐてれ興に物し給は

(一) 壞してしまつて焚物としたこと。

(二) 日々を送つていた。「める」は文法上「めり」を正しいとするが、「風を入れける」も同樣であつて當時ひろく使はれてゐた語法

(三) 前世の因緣の惡いことから成功の能が出ない。

(四) 笛吹き囃しの意

(五) 依頼して。

(六) 思はぬ運にもあふ世なら。

(七) 渡世の便。